

# 農林水産大臣賞受賞

水田の持つ生物多様性の回復を目指し 人も魚も賑わうむらづくり

受賞者 <sup>さと</sup>せせらぎの郷

<sup>しがけん やすし</sup>  
(滋賀県野洲市)

## ■ 地域の沿革と概要

「せせらぎの郷」(須原)のある野洲市は、滋賀県の南部に位置し、北は琵琶湖に接している。JR東海道線で大阪市まで約1時間、京都市まで約30分であり、京阪神への通勤者も多い。野洲川の下流地帯の肥沃な土壌と豊富な用水に恵まれ、古くから良食味良品質米が収穫される穀倉地帯として発展してきた。野菜については、都市近郊の立地条件を活かし、京阪神市場への出荷も行われており、特に春菊は有数の産地となっている。時代に即応した米作りや、果物や野菜などのブランド化、ふるさとの作物を加工した新商品の開発などに力を注いでいる。また、農林水産業等における資源をまちづくりに生かすため、地産地消を進めているところである。

須原地区は、野洲市北部に位置し、農地が琵琶湖に接するため、大雨のたびに水田の湛水被害が頻発していた。また、農耕用の牛を田舟で運搬するなど、農作業は重労働であったが、昭和47年から始まった琵琶湖総合開発事業の琵琶湖治水とほ場整備による乾田化の効果で、大型機械の導入が可能になり、効率的で合理的な近代農業を営めるようになった。

## ■ むらづくりの概要

1. むらづくりの基本的特徴  
(1) むらづくりの動機、背景

第1図 位置図



※ 白地図 KenMap の地図画像を編集

第1表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	集落	
地区の性格	地縁的な集団等	
農家率 (内訳)	48.3%	
	総世帯数	87戸
	農家数	42戸
販売農家数 (内訳)	33戸	
	専業農家	5戸
	1種兼農家	1戸
	2種兼農家	27戸
主要作物 (農業産出額)	水稻	25.7(百万円)
	みつば	2.6(百万円)
	大豆	1.0(百万円)
農用地の状況 (内訳)	耕地計	44.3ha
	田	42.2ha
	畑	2.0ha
	樹園地	0.1ha
	耕地率	61.5%
	農家一戸当たり農用地面積	1.05ha

## ア むらづくりを推進するに至った動機、背景

農地は、大変肥沃であるが、大雨の度に水害に遭うほか、クリーク地帯であったため、重労働を余儀なくされながら、先祖からの農地を守り、耕作してきた。ほ場整備等によって、大型機械の導入が可能となり、効率的で合理的な近代農業を営めるようになった。

しかし、その一方で京阪神への交通のアクセスも非常に良くなったことから、若者たちは働く場を都会に求めるなど、農業を離れ、後継者不足という課題が見え始めてきた。

そうした危機感のなかで、先祖代々守られてきた水田を、集落全体で次世代に引き継いでいくため、平成2年に須原農業組合が設立され、転作の小麦などの栽培を行うなど新たな取組も始まった。その後、平成19年度に新たにスタートした「世代をつなぐ農村まるごと保全向上対策（滋賀らしい農地・水・環境保全向上対策）」により、「せせらぎの郷」を組織することとなった。



写真1 昭和30年頃（農業も田船で）

## イ むらづくりについての合意形成の過程とその内容

「せせらぎの郷」では、農家だけでなく地域住民も一緒に、子どもから高齢者まで活動に参画できるよう、寄り合いを重ねた。都市住民との交流を通じて地域の活性化を図るとともに、琵琶湖固有種の保全再生など、水田の豊かな生態系や景観、伝統文化の継承を図り、先人の残した貴重な財産である「須原の土地は須原で守る」という精神を後世に伝えて行くための手法などが検討された。

その結果、平成20年度から、琵琶湖と田んぼがつながり、フナなどの湖魚が田んぼで産卵し繁殖するという田んぼをもう一度再現する「魚のゆりかご水田」の実現を大きなテーマとして取り組むこととなった。

## ウ 現在に至るまでの経過等

「魚のゆりかご水田」に取り組み、田んぼがかつて有していた魚たちの産卵場所としての機能を取り戻すため、排水路を堰板や土のうなどで階段状に堰上げして魚道を造り、田んぼに遡上しやすい環境を整えることにした。

しかし、「魚のゆりかご水田」に取り組むに当たっては、高齢者の新たな取組に対する抵抗感が見られたほか、排水路を堰上げすることにより自由に水管理ができないことや、除草剤の使用制限を受けることなど、取組に反対する声があがった。このため、取組の意義について地



写真2 排水路に堰板の設置

地域ぐるみで話し合いを繰り返し行うことにより、全員の同意を得て実施することになった。

こうした取組により、琵琶湖周辺の田んぼでごく当たり前に見られた、琵琶湖から水路を通じて田んぼにやって来た魚たち（フナ、ナマズ、コイ等）が産卵・生育し、中干し時期には琵琶湖に戻っていくという生息環境を取り戻すことができた。

## (2) むらづくりの推進体制

### ア 当該集団等の組織体制、構成員

「せせらぎの郷」は、農業者（個人と農業組合）と自治会、消防団、子供会など既存の組織を包含し、須原の住民は全て含まれるものである。

農業組合は、集落営農を進めるために組織され、共同機械を所有・管理し、作業受委託を行うなど、須原の農地は須原で守ることを目的に活動している。

第2図 むらづくり推進体制図



### イ むらづくりに関して、連携する他の組織、団体との関係

#### ○須原まちづくり推進協議会：

須原集落内で8部（総括、文化活動部、体育活動部、青少年活動部、人権擁護活動部、

健康福祉活動部、生活改善部、環境整備部)を設けて、須原のまちづくりを推進している。

#### ○須原魚のゆりかご水田協議会:

「せせらぎの郷」のメンバーを中心に組織され、魚のゆりかご水田実施の中心となっている。

#### ○すまいる市:

野洲市内の農林水産業者、商工業者、NPO等(約200団体)で構成され、地区通貨「すまいる」を介在させ、地産地消と太陽光発電の普及を目指し、経済と環境の両立を図っている。須原の魚のゆりかご水田米はここでも販売されている。

### ■ むらづくりの特色と優秀性

#### 1. むらづくりの性格

須原地区では、農家だけでなく非農家も一緒になって、人も生きものにもぎわう農村を目指して、「魚のゆりかご水田プロジェクト」に取り組んでいる。特に、都市住民との交流活動において、大阪の企業とオーナー契約を結び、農業体験や魚つかみ、稲刈り体験など年4回にわたって延べ320人程度を受け入れるなど、従来の枠組みに捕われず、地域が一体となった取組が行われている。



写真3 稲刈り体験

また、持続可能な取組にするための検討が行われており、「魚のゆりかご水田米」の販路拡大に向けてのPR活動なども積極的である。

これらの活動が多く数の消費者の共感を得て、魚のゆりかご水田米のブランド化による販路拡大が図られ、農業経営的に成り立つことにより、今後の発展性、継続性に大きな期待を持てる。都市住民との交流活動などを通じて「生きもの大切さ」、「安全で安心な米づくり」をPRし、それを地域の活性化につなげていきたいという思いが強く、営農活動を通じて地域の文化を継承するとともに、食を支え、多くの生きものを育てている。

こうした活動は、地元小学校や企業、JAなどの団体とも連携して行われており、野洲市全体にも良い影響を与えている。

また、昨年10月に愛知県で開催されたCOP10においても地域活動団体として展示ブースに出展し、「生物多様性」に配慮した「魚のゆりかご水田プロジェクト」の活動は、海外の方々にも評価され、興味深い内容として受け止められた。

生物多様性や自然環境の再生・保全を考えた取組が、生きものと人の賑わいにつながり、若手農業者のやる気を芽生えさせ、担い手育成にもつながり、また、多くの周辺集落にも好影響を与えている。

#### 2. 農業生産面における特徴

## ア 農林漁業における生産面、流通面の取組状況

農業機械の共同購入や、農作業の受託等の共同化を通して効率的な農業経営を実現できるよう、地域ぐるみで田畑の耕作を行っている。

現在、須原では総水田面積42haにおいて、水稻30haが栽培されており、そのうち約6ha（H23）で「魚のゆりかご水田」に取り組んでいる。「魚のゆりかご水田米」は、県の環境こだわり農産物認証制度による環境に優しい米作り（農薬や化学合成肥料などを50%以下に低減）にプラスして、魚毒性の低い除草剤を使用し、人にも魚などの生きものにも優しいお米として消費者に提供している。

また、田植えからはじまり収穫に至るまでの様々なイベントなどを通じて多くの都市住民に提供している。

## イ 認定農業者や集落営農等担い手の状況

認定農業者3名、専業農家5戸、その他は兼業農家の状況である。近年、後継者問題が課題であったが、「魚のゆりかご水田」の取組を始めてからは、30～40歳代の方が、環境面に配慮した有機栽培に関心をもって新たな農業にチャレンジするようになってきた。

## ウ 新規就農の状況や企業等の参画状況

「魚のゆりかご水田」への取組をきっかけに、新規就農者も見られるようになった。

大阪の企業とのオーナー契約や神戸の高校生の体験交流などと新たな連携ができ、今後の可能性が期待できる。さらに、昨年度はCOP10が愛知県で開催されたこともあって、「生物多様性」という言葉が理解されはじめ、「魚のゆりかご水田」は新聞などで報道されることによって、中部圏や首都圏にまでも知られるようになった。



写真4 COP10での様子

## エ 農地の利用集積、耕作放棄地の解消

高齢者の所有などにより耕作を続けることが困難な農地においては、利用権の設定を行って利用集積することにより、耕作放棄地が出ないような取組を行っている。

## オ 加工・販売等の経営の多角化、環境保全型農業への取組、食品産業との連携等の状況

「魚のゆりかご水田米」として米の販売を中心に行っている。一方、野洲市では、「米粉スイーツ活性化計画」の下、米を加工して「米粉パン」などの加工品製造についても事業化を考えていることから、本地区でも加工品の直売等についても連携をしていきたいと考えている。

また、「魚のゆりかご水田」は環境保全型農業であり、全国知事会でも先進政策大賞を受賞するなどその取組は評価されている。

### 3. 生活・環境整備面における特徴

#### ア 生活・環境整備面の取組状況

農地・水・環境保全向上対策の共同活動として、集落周辺水路の法面に景観植物の植栽を行う等、生活環境改善に取り組んでいる。

#### イ 地産地消及び食育の推進、都市住民との交流等への状況

野洲市教育委員会の協力を得て、地元小学校に魚のゆりかご水田米を納入し、給食の当日には出前講座として趣旨等を説明するなど、地元食材を通じた食育の取組が実践されている。

一方、おうみ富士農業協同組合の直売所や市内のスーパー等で販売されるなどにより、地産地消につながっている。

また、魚のゆりかご水田のオーナーを一般公募したところ、平成22年度は多数の応募があり、抽選で18組を選んで実施した。地元だけでなく、京阪神、中部圏などの消費者との農業体験や生き物観察会、交流会の開催を通じ、地域の活性化を図っている。神戸の高校生や、様々な大学と魚のゆりかご水田の現地研修や研究を通じて交流が進み、それが消費拡大にもつながっており、今後発展する可能性に期待が持てる。

また、おうみ富士農業協同組合との連携により東京でのJAまるしえへの出展を始め、都市住民へ「生物多様性」と「食の安全・安心」を積極的にPRしていく方向で取り組んでいる。



写真5 オーナー田の田植え

#### ウ 地域資源の保全・活用やコミュニティ活動の強化等の状況

本取組の中心的活动メンバーの多くが、子どもの頃に「魚つかみ」に夢中になった経験を持つ。また、田んぼでつかむことのできた「ニゴロブナ」は、郷土料理である「ふな寿司」の原料として活用されるなど、まさに地域に根ざした食文化につながっている。

須原の活動も昭和の時代の「農村を復活したい」という想いが背景にある。琵琶湖周辺の農村では、琵琶湖のヨシを肥料とし、春の田植えとともに琵琶湖から田んぼに登ってくる湖魚を食し、田んぼで収穫した米を頂く。

地元の祭りで五穀豊穰を祈願する。

こうした農村文化が、この取組を通じて実感や体験として高齢者から子どもたちに伝承されている。

生きもの観察会という名の「魚つかみ」では、地域住民はもとより、県内外から集ま



写真6 生きもの観察会

った大人から子どもまでが無邪気に喜び、収穫祭では、懐かしい農機具などの展示や実践なども行い、天の恵みに感謝して新米を戴く。機械化され、合理化を追求した農業のなかでこの活動は、地域の自然の恵みに感謝し、地域文化に根付いた営農を行うことが大切であることを地域住民だけでなく、この活動に関わる都市住民にも教えてくれる。

「農」を通じて、様々な交流が行われ、世代や性別、地域を越えたコミュニケーションが行われる。また、都市住民や学生などから注目されることによって、地域住民にも変化が見られるようになった。

当初は、役員だけで行っていた「魚道づくり」に参加する人も増え、生きもの観察会では、子どもが来ることで非農家の大人やお年寄りなどの参加も年々増えており、地域の連帯感も強まっている。

## エ 女性の活動、高齢者の生きがい活動その他多様な主体の参画した活動状況

様々なイベントを行う際には、女性グループの方々が中心となって、魚のゆりかご水田米のおにぎりやしじみ汁などが振る舞われる。イベント活動だけでなく、今後「魚のゆりかご水田米」の加工や6次産業化を検討するうえで、女性グループの活躍が期待される。

## オ その他地域の生活安定・向上のための取組等について記述

「世代をつなぐ農村まるごと保全向上対策（滋賀らしい農地・水・環境保全向上対策）」を柱にして進めてきた「魚のゆりかご水田」は、地区一丸となる取組になり、一体感が出てきている。

また、通常の米に比べて高値で販売され、農業収入を増やすことにも寄与している。

今後は、さらに「魚のゆりかご水田米」の販路拡大や都市住民との交流を推進し、新たに6次産業化なども視野においた活動を展開することによって、須原地区の活性化につなげ、活力溢れ、人も生きものものにぎわう須原を目指していきたい。